HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大岡昇平における歴史 (一)
Author(s)	柴口, 順一
Citation	北海道大學文學部紀要, 41(2), 141-188
Issue Date	1992-10-27
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33602
Type	bulletin (article)
File Information	41(2)_PR141-188.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

大岡昇平における歴史（一）

柴口順一

序

わが国において、歴史小説に関する問題を最も持続的に考えたのは大岡昇平であった。そして、結果として最もすぐれた歴史小説論を書いたのも大岡昇平である。

歴史小説に関する論は、近代文学発生とほぼ同時に現われた歴史小説とともに現われた。日本で最初の小説論『小説神髄』に、「時代小説の脚色」という一項が設けられていたのは周知のとおりである。以後、歴史小説が連綿と書き続けられるとともにそれは書き続けられてきた。しかし、それらの多くは、単なる感想の域を出ないいわば随筆程度のレヴェルにとどまっていたといってよい。それらの論の素朴さ、いっそ無邪気といってよい素朴さは驚くばかりである。その数は極めて多く、ほぼ時代的な流行に左右されることなく絶えず書かれていることを考えるに、その感はいっそう深い。むろん、それを持続的に考えた人もいなかった。まとまった歴史小説論といえる一書が編まれることがなかったのもそのためである。大岡以前にわれわれは、岩上順一の『歴史文学論』（中央公論社、'42・3）ただ一書

しか持たなかったのである。岩上の論は、日本の歴史小説をある程度大系的に論じようとした試みとして画期的なものであったが、その理論は明らかにルカーチの『歴史文学論』（山村房次訳、三笠書房、'38・11）に負っていた、というよりは、ルカーチの理論をそっくりそのまま日本の歴史小説に当てはめたものだったのである。

大岡昇平は、それまでの未解決の多くの問題をほとんど一手に引き受けざるを得なかった。そして実際大岡の論は、それらをよく担い得た論になっていたのである。しかも、大岡はそれを自前の理論でよく考えようとした。その意味で、大岡を待ってはじめてわれわれは本当の意味での歴史小説論を持ったといえる。

それだけではない。大岡昇平はそれと並行して多くの歴史小説を書いている。しかも重要なのは、それらの作品がいずれも、明らかに歴史小説に対する強烈な問題意識に裏づけられていたことである。だから、ある意味で大岡の歴史小説は、歴史小説論としても読めるという側面があるといえる。他の歴史小説作家やいわゆる時代小説作家も作品を書くかたわら、好んでよく歴史小説に関する発言を行なっていた。しかし、それらの多くは自作の解説や弁護、あるいは作品製作の楽屋話しに終始していたのである。すぐれた歴史小説論を書くとともに、様々な問題性を持った作品をつぎつぎに書いた人は、大岡昇平をおいてはいない。

大岡の問題意識は要するに歴史と小説、あるいは歴史と文学の問題であったことはいうまでもないが、それはつまるところ歴史の問題であった。でなければ、ことさら歴史小説を問題にすることはしなかったであろう。大岡の作品の多くが、歴史小説というよりはむしろ歴史記述というべきものであることもそれをよく示しているといえる。むろん、大岡の歴史小説論も結局は歴史あるいは歴史記述という問題意識に貫かれていたことはいうまでもない。そしてその点からいえば、大岡はもうひとつ重要な仕事を行なっている。だれしもがそれぞれ最も詳しい歴史の記述、すな

わち自伝である。そして、ここでも大岡は独自の方法意識を持った独自な自伝を実現していたのである。

大岡昇平における歴史の問題を、以下それぞれの側面から明らかにしようというのが本論の目論見である。それを明らかにすることは結局、歴史記述と歴史小説に関する問題の今日におけるひとつの達成を示すことになるだろう。それと同時に、今われわれに残されている問題は何なのか、その問題の所在をも明らかにしてくれるであろう。

そこで、まずは大岡が歴史あるいは歴史小説への関心を持つきっかけとなったと考えられる、井上靖とのいわゆる『蒼き狼』論争から見ていくことにする(第一章)。続いて、その数年後に書かれる一連の歴史小説論を検討する(第二章)。大岡の歴史小説に対する基本的な考え方がここで開陳されることになる。そして、それから更に十年後、菊地昌典の歴史小説論発表をきっかけとして書かれた「歴史小説の問題」を見ることになる(第三章)。以上、三章にわたって大岡の論を詳細に検討することによって、大岡の理論的推移ないしは発展の様相を見ることができるとともに、それまでの歴史小説論の緒相もまた明らかになるであろう。大岡の論は、明らかにそれまでの論に対する批判的前提の上に成り立っていたからである。とりわけ、森鷗外のいわゆる歴史小説(論)に対する根本的な再検討は、単に鷗外評価という点だけでなく大きな意味を持っている。それまで、鷗外のいわゆる歴史小説(論)はまさに歴史小説(論)の規範として仰がれていたといってよいからである。

さて、第四章以降は主としてその作品を検討する。まずは、ちょうど一連の歴史小説論執筆中に書かれた『天誅組』と、その後数年を経て書かれる『レイテ戦記』を取りあげ、その歴史小説あるいは歴史記述としての方法を考える(第四章)。続いて、『幼年』『少年』における自伝の方法を、歴史記述の方法その他の問題と関連させて考える(第五章)。そして最後に、死によって未完に終った最後の作品『堺港攘夷始末』を、森鷗外の『堺事件』批判の論と合わせ考え

ながら検討することになる（第六章）。

第一章　『蒼き狼』論争

論争の輪郭と問題の所在

いわゆる『蒼き狼』論争は、大岡の「「蒼き狼」は歴史小説か」（『群像』、'61・1）という論にはじまる。大岡は一九六一年一月から十二月まで『群像』に「常識的文学論」と副題を付した連載を行なうが、それはその第一回であり、そこで井上靖の『蒼き狼』（『文芸春秋』、'59・10～'60・7）を取り上げ徹底的な批判を行なった。大岡がこの作品を取り上げた動機は、明らかにこの作品に対する批評家の絶賛といってよい評価に対する反発にあった。具体的に二、三の論[1]をやり玉にあげ、それを批判することから論がはじまっていることがそれを示している。そのような批評家の賞賛がなければ、おそらくこの文章は書かれなかったであろう。その意味でこれは井上靖に対する批判であると同時に、そのような批評家に対する厳しい批判でもあったのである。

それら批評家の論を批判した上で大岡昇平はまず、『蒼き狼』の記述をその主資料である『元朝秘史』の記述と比較するという作業からはじめていく。いくつかの原典との不一致を指摘していいたかったことは結局、『元朝秘史』を読んでも、『蒼き狼』に描かれているような出生の秘密から民族の伝承にある蒼き狼になろうと志した、すなわち大岡のいい方でいえば「狼」の原理」から成吉思汗が行動したということは読み込めないということであり、また実際歴史

的な事実としてもそのようなことはあり得ないということであった。したがって、結論として「蒼き狼」一篇が、一番よく似ているものは、「十戒」から「ベン・ハー」にいたるアメリカのスペクタクル映画である。[2]」という酷評になる。

この論においてもうひとつ見逃がしてならないのは、井上の一連のいわゆる歴史小説に対する見方である。大岡は『楼蘭』（『文芸春秋』、'58・7）、『洪水』（『声』、'59・7）を評価し、それに対して『敦煌』（『群像』、'59・1～5）を『蒼き狼』と同種の作品として否定する。前の二作を評価するのは、いずれも空想をもって書かれているが、その空想が意外とリアリスティックであるという点にある。「井上氏は元来瞬間的な抒情的なイマージュの発明にすぐれた作家である。」と大岡はいう。『楼蘭』や『洪水』のように「瞬間的な抒情的なイマージュ」を描いているうちはよいが、『敦煌』や『蒼き狼』のようなスケールの大きい、いわば歴史的背景を無視できない作品になるとだめになるというのが大岡の見方である。そして『敦煌』『蒼き狼』ラインを「危険な道」と断定する。もちろん、それは井上の文学上の発展においてという意味ばかりでなく、表現されたものとして「危険な道」なのだといおうとしていたことは明らかである。

井上靖は翌二月同じ『群像』に、「自作「蒼き狼」について――大岡氏の「常識的文学論」を読んで――」を書いている。もちろん大岡に対する反論を意図して書かれたものだが、実際は大岡の疑問に対する正面からの反論にはなっておらず、以前に発表した自作についての解説「「蒼い狼（ママ）」の周囲　成吉思汗を書く苦心あれこれ」（『別冊文芸春秋』、'60・6）を大量に引用しながら、自分はどのようなつもりで書いたのかということがその主張の中心になっている。歴史小説の問題についても述べられているが、とうてい大岡の論争の相手ではないという感は否めず、後に大岡も「粗

雑」あるいは「ナンセンス」と評しているように、反論というにはあまりにもお粗末なものであったといわざるを得ない。

大岡は「常識的文学論」の第三回、「成吉思汗の秘密」（『群像』、'61・3）においてただちに反論を行なう。大岡は井上の反論を四点に整理し、先の論での主張を確認しながら井上の論をほとんど完膚なきまでに論破しつくしているといってよい。井上が再反論を行なわなかったのは、大岡とのすれちがいあるいは平行線をいち早く感じとり、論争の不毛を回避するためではおそらくなかったであろう。

この論争には他に山本健吉や福田宏年らも加わるが[3]、その中心はやはり大岡――井上――大岡という一往復のやりとりにつきる。論争の、あくまで論争としての成果という点では否定的たらざるを得ない。しかし、この論争はそれなりに意義ある論争として位置づけられている。それは、ことが歴史小説をめぐるいわゆる歴史と文学という、その問題の展開としては大きなそして重要な問題であったからに外ならないが、それまでそのような問題をめぐる論争と呼べるような論争が実はほとんどなかったためでもある。それはたとえば政治と文学をめぐる論争と比較してみれば明らかであろう。そしてもうひとつの理由は、後の大岡昇平の一連の歴史小説論を生むいわばきっかけとなったと見ることができるからである。確かに、後の大岡の歴史小説論の達成やあるいは実作である『天誅組』、『レイテ戦記』等における方法を考えれば、この論争にはそれなりに意味づけができるであろう。この論争を豊かにあるいは生産的に読むためには、そのように遡及的に位置づけるしかないことも確かである。しかし、そのようなやり方はひとつの論争を論争として評価する方法としてはやはり正当とはいえず、また大岡論としてみても問題がないわけではない。そして、現にそのようなやり方がある意味ではこの論争を、ひとつの論争それ自体としては卑小化してしまう結果と

なり、そこから問題を引き出そうとする芽を摘み取っていたといえるのである。ありていにいえば、大岡がその論理性において圧倒的な優位を示していたあまり、その細かな論証の検証をおこたり、そのためにやや過剰に優位性を強調することで終っていたのである。むろん、それは一方の井上を必要以上におとしめていたことでもあることはいうまでもない。

『元朝秘史』とその読み

最初の論で大岡昇平は、『蒼き狼』の主資料である『元朝秘史』[4]の記述の改竄を三点指摘している。

第一は、「狼」を「山犬」に変えた点である。作品はじめの方、成吉思汗（鉄木真）がカサルとともに異母弟ベクテルを殺したのを、母親のホエルンが激しく怒る場面で、原典ではホエルンの叱責のことばとして「風雪に靠り頭口を害ふ狼の如く」[5]とあるが、井上はその「狼」を「山犬」に変えてしまったというのである。因に、大岡はベクテルを「ベルグタイ」といっているがあやまり。これは井上の反論にも指摘があり、単行本『常識的文学論』（講談社、'62・1）所収の際に改めているが、「ベルテル」と再びあやまっている。なお、このあやまりは『歴史小説の問題』（文芸春秋、'74・8）をはじめとする諸書から『大岡昇平集14』（岩波書店、'82・9）に至るまで踏襲されている。大岡は、井上がそのように変えた理由を「これはあまりさつそうたる狼ではない」からだと述べている。これに対して井上は、「恐らく狼と書くより〝山犬〟と書いた方が、混乱を防ぎ得るという考えから〝山犬〟と書いたのに違いない。」といささか歯切れの悪い弁明をしているが、大岡は再論で更に徹底した批判を加えている。それは省略するが、ただ再論

における次の発言については一言述べておく必要がある。

なおまさかと思つていままで気がつかなかつたが、氏は「頭口を害う狼（ママ）」を滑稽にも「頭を害う山犬」と書いていた。頭口は明初の俗語で、牲口即ち家畜で「頭」とはなんの関係もない。こうかん違いしていては無視するのは当然で、文句をつけた私が野暮だつた。

ところが、初出『文芸春秋』では「頭口」となっている。「頭」とあるのは連載終了後間もなく上梓された単行本『蒼き狼』（文芸春秋新社、'60・10）においてであり、大岡はこちらしか見ていなかったのであろう。正確に何版からかはわからないが、後に単行本も改められその後新潮文庫（新潮社、'64・6）をはじめ全て「頭口」となっている。初出が「頭口」であったことを考えれば、単行本初版以下数版は単純な誤植だったと思われる。

それを別として、大岡の指摘は確かにそのとおりで、井上がまともな反論を行なえなかったのも無理はない。しかし、その変えた理由を、あまりさっそうとしていなかったからであるとするのはやや的を射そこなった指摘であったといわざるを得ない。述べたように、このことばは母親ホエルンがベクテルを殺した成吉思汗とカサルを叱責することばで、原典にはその他に、「胞衣を咬む合撒児の狗の如く、崖を衝く合卜闌の如く、怒りを抑ふる能はざる獅子の如く、活きたるを呑むと云ふ蟒の如く、己が影を衝く海清の如く、声無しにて呑む出喇合の如く、その子駱駝を後跟より咬む駱駝の如く、（次に狼がくる――引用者注。）その子どもを追ひかねてその子どもを喫ふ鴛鴦の如く、その臥処を動かせば党護する豺狼の如く、拏へて猶予はざる虎の如く、妄に衝く巴嚕思の如く」と、多くの動物をひきあいに

出し、これら残虐な動物たちのようにおまえたちは兄弟を殺してしまったのだと諭しているのである。だから、あまりさっそうとしていないからというよりは、それらもろもろの残虐な動物たちと同じ動物としてホエルンが狼をあげることは、当然都合が悪かったからだというべきであろう。井上は原典にある以上全ての動物の記述を、順番もそのままに作品にとり入れていたのである。大岡はそのことに気づいたのか気づかなかったのか、『大岡昇平集14』において、先に引いた再論における「頭口」云々の発言に大幅な加筆を行なっている。

ここにおいて、氏がここだけ山犬と書き替えた「象徴的」な意味がはっきりして来る。ここで頭でなく「頭口」とするのは、現代の読者には意味不明になる。「家畜」と書き替えねばならぬ。すると文章は「家畜を害う狼」となって、成吉思汗が攻撃精神の旗印とした狼が、蒙古人にとって大事に(ママ)財産たる「家畜を害う狼」として、本文に明らかに、なってしまう。そこで「頭口」を「頭」に、「狼」を日本的な「山犬」と書き替えて、意味不明の「象徴的」な文章にしたのだ。この辺の氏の狡猾な詐術は弁護の余地なきものである。

ここでも大岡は「頭」を踏襲しているがそれはともかく、原典どおり「頭口を害う狼」とした場合、「蒙古人にとって大事に(ママ)財産たる「家畜を害う狼」」となり都合が悪くなってしまうというのはそのとおりであろう。ただそれならば、「狼」を「山犬」に変えるだけでよいはずである。大岡はやはり「頭」に少々こだわりすぎていたといわざるを得ない。なお、最初の論における「あまりさつそうたる狼ではない」といういい方はここでも訂正されてはいない。

ところで、先に引いた原典の記述の中で少々気になるところがある。それは「その臥処(ふしど)を動かせば党護(とうご)する豺狼(さいろう)の

如く」という記述で、井上もほぼそのまま作品に取り入れているのだが、何故この「豺狼」の方を変えなかったのかということである。大岡もこちらについては述べていない。「狼」を「山犬」に変更したことを批判するならば当然こちらについても何らかの言及があって然るべきであろう。「豺狼」とはまさに山犬と狼のことなのだから。

第二の改竄は、原典の「多き羊を狼の(ナシ)追ひて圏に到るまで追ひて来るが如きは、これらはいかなる人かかく追ひ〔て〕来〔ぬ〕る」という記述が、作品では採用されていない点である。大岡は、「これはナイマンの将が成吉思汗の軍を見て言う言葉だから、狼が深追いして捕えられる愚かな獣として表わされているのは当然である。」と述べ、都合の悪い狼の記述をことさら落したのだと批判するのである。これに対して井上靖は、「もともと私にとつて、「蒼き狼」という全く別種の象徴された狼だけが作品の主題に関係あるものとして必要なのであつて、蒼くない狼について「元朝秘史」にどのように記述があろうと、たいして関心のないことである。」とつっぱねている。ここでの井上の反論は一理なしとはしない。しかし、ことは狼に関する記述であり、井上がいう「作品の主題」に関わる狼である以上、原典に数少ない狼の記述を自分の考える「蒼き狼」とは関係がないとして切り捨てるのは、恣意以外のものではないことになろう。再論において大岡が、「ナイマンとの合戦の場面の原文を、もう一度思い出してくれゝばいゝのである。」とことば少なに一種あきらめといってよい対応をしているのも、けだし無理からぬところであろう。

しかし、ここでも大岡のものいいに疑問がないわけではない。先の原典の記述は、大岡もいうようにナイマンの将タヤン・カンのことばなのだが、これはその場にたまたま来あわせたジャムカという人物に、あの成吉思汗の軍はどのようなやつらなのかと尋ねていることばなのである。ジャムカは成吉思汗の幼な友達で、かつてはともにメルキト族を討ったこともあるが、その後は長く敵対関係にある人物である。しかもこのあたり、原典ではタヤン・カンが成

吉思汗の軍を恐れ、かなりおびえている様子がありありと描かれている。この記述の少し前には、おじけづいたタヤン・カンに対し子のグチュルクは「婦人塔陽は、心怖ぢて」云々というように子にあるまじきことばを吐き、また部下のゴリ・スベチは「嗚呼、懦き塔陽、臆病の如くのみあり」と嘆息し、タヤン・カンのもとを去ってしまうというありさまなのである。以上のことを考えれば、タヤン・カンが成吉思汗の軍を「深追いして捕えられる愚かな獣」として捉えているとは必ずしも読めず、「多き羊」を狼が圏にまで追いつめるというまさしくさっそうたる姿ととれなくもないのである。タヤン・カンに問われたジャムカはその勇猛さをこと細かに説明するのだが、それを聞いたタヤン・カンは「但しかあらば、それらの下人より遠く立たん」といい、「又退り山に登り立てり」というように後退戦を演じるのである。因に、村上正二訳注『モンゴル秘史2』(平凡社、'72・4)ではこの部分、「〔いよいよ臆病風に吹かれた〕タヤン・カンが申すには」として〔 〕の部分を補って訳してある。大岡も後にやや不適切な言であったことに気がついたのであろうか、『常識的文学論』所収の際には、「深追いして捕えられる愚かな獣」を「困つた獣」と書き変えている。だが、このように変えても基本的な読みは変わっていないことはいうまでもない。

以上二点の指摘は、原典にある「狼」の記述のいくつかのうち例として二つたまたま引かれたものというわけではない。大岡はあらかじめ「私の気がついた限り、「元朝秘史」に狼がでて来るのは、ほかに二ヵ所ある。」と述べていた。二箇所のほかのもうひとつは『元朝秘史』冒頭の「上天の(より)命により(あり)て生れたる蒼き狼ありき。その妻なる惨白き牝鹿ありき。」で、井上も作品はじめの方で、集会の際に古老たちが唱和する伝承としてほとんど原典の記述のまま記している。大岡は自分の気がついた限りこれを加え全部で三箇所あるとしているのであるが、実際はもう二箇所(三つ)ある。ひとつは、成吉思汗の遠い祖先が記されている部分で、ボドンチャルという人物が兄弟たちに

見捨てられ一人苦難の生活を送る部分の記述にある。

> 喫ふ食物なく住めるには、狼の崖にて取巻ける獣を窺ひて射て殺して喫ひ合ひ、狼の喫へるを拾ひて喫ひ、己の喉を又黄鷹を養ひ合ひ、その年過ぎたり。

もうひとつは、成吉思汗が全蒙古を統一しカンの地位についた際、勲功のあった者に対して次々と褒賞を与える記述の部分で、クナンという人物の勲功をたたえる成吉思汗のことばにある。

> この忽難、黒き夜は雄狼、明き昼は黒き老鴉となりて、……。

作品にはむろんこの二つに関する記述はないが、ここでの狼はいずれも井上にとっては特に都合の悪い狼ではない。だとしたら、大岡がこの部分に言及しなかったのは単なる見落しではなかったのではないかとも邪推される。

さて第三の改竄だが、これは第一の場合とちょうど反対のケースになる。すなわち、原典の「狗」、「馬」をそれぞれ「狼」に変えたことである。ここも先と同じナイマンとの戦闘場面で、作品には成吉思汗のことばとして「あゝ(あ)、〔モンゴルの〕四頭の狼が行く」とあるが原典では「狗」であり、また「あゝ(あ)、走り廻つている。(句点は!)朝早く放た(ナシ)れた狼の子が、母の乳を吸つて、(読点ナシ)その周囲を走り廻つているように(だ)」とあるが、これは「馬」であるというのである。ただし原典では「馬」ではなく「駒」である。「朝早く放たれた狼の子」がすでにナンセン

スだが、戦場で母の乳を慕う如く、走り廻るのは、自殺行為であろう。原文ではこれも敵将の言であるから、モンゴルの軍に素早く迂廻された恐怖を表わして、自然である。」と大岡は述べ、井上の改変を「意味不明」と一蹴する。これに対して井上はほとんど弁明らしい弁明を行なわず、「これも『元朝秘史』という書物の性格からして、問題にならぬことだと思う。私はもう一度書き直したとしても、やはり狗とは書かないで狼と書くに違いないと思う。」と態度を硬化させる。大岡は再論で、「氏はナイマンとの合戦の場面にふさわしい狼描写がほしかった。その要望は「狗」を「狼」に替え、さらに「馬」も「狼」にして」しまったのだと再び厳しく批判するのである。

ここでの大岡の指摘はほぼそのとおりである。ただ少々細かな難避をつけておくならば、原典の文を敵将の言であるといっているのはあやまりではないが、原典の「四つの狗」ということばは、先と同様タヤン・カンに問われたジャムカの答えにはじめてでてくるもので、それを聞いたタヤン・カンがそれを受けて「それら四つの狗、誰誰はそれらか」と再び尋ねていることばであった。

以上、三点にわたる大岡の指摘を見てきた。改竄の事実それ自体の指摘にあやまりはない。が、その理由の推測は、『元朝秘史』の読みということとともに必ずしも妥当なものとはいえないのである。しかも引用のはなはだしい不正確さは、論争を行なう者の態度としては杜撰であったといわざるを得ない。引用の不正確を指摘することはともかく、井上は大岡の『元朝秘史』の読みに対する反論はできたはずであった。そうしたならば、自己の改竄を積極的に弁護はできないまでも、大岡の推論、あるいは邪推ともいえる大岡の論をある程度反批判することはできたのである。井上がそれを行なっていたならば、大岡の再論はもっとちがったものになっていたはずで、そこから『元朝秘史』の読みをめぐって新たな論争が展開していくこともあり得たであろう。そうならなかった責任はもちろん、自分はどのよ

うなつもりで書いたのかということをくりかえすのに忙しかった井上にある。しかし、大岡にもその責任の一端はあるのである。

ところで、『元朝秘史』の読みということでいえば、実は井上へのほとんど破壊的な批判になり得る点を大岡は読みとりそこなっていた。それは、そもそも成吉思汗が蒼き狼の血を引いているか否かに悩むことなどあり得ないということである。大岡は、成吉思汗がそのように悩むこともまたそれを克服するためにみずからの行為によって狼であることを証明しようとしたことも、『元朝秘史』には全く書かれていないといっていたが、そういうことではなく、そもそもそのような発想をするはずのないことが、『元朝秘史』を読めば明らかなのである。何故なら、成吉思汗は現に蒼き狼の血を引いてはおらず、また彼自身もそのことを知っていたからである。『元朝秘史』は冒頭、蒼き狼と惨白き牝鹿から生まれた初代バタチカンの誕生からはじまり、以下えんえんと直系の血筋をたどっている。ところが、十一代のドブン・メルゲンの代に至り不思議なことが起こる。ドブン・メルゲンは二人の子を残しやがて死ぬが、その妻アラン・ゴアはその後三人の子を夫なしで生むのである。その辺の事情を『元朝秘史』は、「夜ごとに光る黄色の人、房の天窓の戸口の明処より入りて、我が腹を摩りて、その光は我が腹の内に透るなりき。出づるには、日月の光にて、黄狗の如く爬ひて出づるなりき。」と記している。つまり、アラン・ゴアは「日月の光」と交わり三人の子供を生んだわけである。そして成吉思汗に続くボルジギン氏族へと続くのはその「日月の光」とのあいだにできた三番目の子ボドンチャル・モンカクであった。したがって、成吉思汗は蒼き狼の血は引いていないことになる。ドブン・メルゲンとのあいだにできた二人の子だけがその血を引いていることになるが、この二人はそれぞれまた別な氏族をつくっていく。この「日月の光」の話しは、蒼き狼の話しとともにモンゴル部族に伝わるいわば二つの始祖神話なわけだが、

成吉思汗が意識するとするなら当然この「日月の光」の神話の方になるはずで、もともと血を引いてない蒼き狼を意識するはずはないのである。

しかしこれらのことは、実は『元朝秘史』をわざわざ繙いてはじめてわかることではない。すなわち、作品『蒼き狼』において井上は、そのことをほぼ原典どおりに書いていたからである。まだ鉄木真であった七歳のときはじめて成吉思汗は、ブルテチュ・バガトルという古老からその話しを聞く。もちろん、バタチカンからはじまり歴代の祖先の話しのひとつとしてそれを聞いたわけだが、作品ではこの老人の話しはアラン・ゴアの話しで切れている。その最後に老人は、「ボドンチャル・モンカクの流れを汲むわれわれボルジギン氏族の者の躰には、だから、美女アランの血と天の光が入り混じってはいっているわけじゃ」と強調していた。にもかかわらず何故成吉思汗はそれに興味を持たなかったのか。それは「語り手が誇りやかに話すその話も狼と牝鹿の話に較べれば、遥かにつまらない光のないものに思われた。」からであるが、しかしそこから、自分がはたして蒼き狼の血を引いているか否かに悩むことは絶対に起こるはずはないのである。大岡昇平は、いわばこの作品の欠陥をも読みとりそこなっていたのである。

結局、大岡昇平はやや瑣末な語句の変更にこだわりすぎたといえる。少なくとも井上にとっては強くそう感じたはずで、もともと『元朝秘史』の記述を忠実に作品化したわけではない作品のごく一部の語句の変更を指摘されることは、実に些細で瑣末なことに思えたであろう。しかし、大岡のいいたかったことはむろん単なる語句のレヴェルの変更にあったわけではなく、井上の『元朝秘史』の読みという問題であった。見てきたように、大岡自身のそれも必ずしも妥当なものではなかったわけだが、しかし狼に関する記述を変更することで井上は、結局『元朝秘史』に書かれていることをもゆがめてしまったのだというのが、大岡のいいたかったことであった。そして更にいいたかったのは、

そればかりでなく同時に歴史的事実をもゆがめているということにあったのである。しかし、この点についての大岡のやり方にもまた問題がなかったわけではない。というのは、いわゆる歴史的事実の方を大岡は結局「われわれの歴史的常識」、井上のことばを借りれば「どの歴史教科書にも記されていること」で説明していたにすぎないからである。

> 彼の統一は「狼」の原理に忠実であつたためではなく、氏族連合体を、専制君主制による軍事国家に編成替えしたことによつて可能であつた。遊牧を掠奪というより手取り早い生産様式に代えたことである。

大岡の説明はむろんまちがいではなかろう。そして「歴史的常識」からだけでも確かに、『蒼き狼』はおかしいのだということをいえるにちがいない。しかも、もっぱらこの「常識」をもって批判しようというのが、その連載の副題も示すとおり、大岡のあえて選んだ方法でもあった。しかし、いわゆる歴史的事実について述べるならば、やはり他の歴史的資料を用い、ある程度の歴史学的手続きを踏んで説明するのが筋であろう。論を見る限り、大岡はドーソンの『蒙古史』と小林高四郎の『ジンギスカン』くらいしか読んでいない。因に前者は早くから岩波文庫に入っており、後者は岩波新書である。そしてこの点では井上靖の方がはるかに多くのものを読んでいたのはいうまでもない。井上の前掲論「「蒼い(ママ)狼」の周囲　成吉思汗を書く苦心あれこれ」には、ドーソン『蒙古史』をはじめ多くの書があげられ、更には『長春真人西遊記』、耶律楚材『湛然居士集』といったものがあげられていた。長春真人と耶律楚材は『元朝秘史』には登場せず、主としてこの二著によって井上は『蒼き狼』に二人を描いていたのである。

井上靖の一連のいわゆる歴史小説に対して大岡は、『楼蘭』と『洪水』を評価し、『敦煌』を『蒼き狼』と同種の作品として否定する。これに対して井上は、「『楼蘭』は歴史そのものを書きたかったので、あのように史実を並べた書き方をしたのであり、『敦煌』は歴史のブランクを、一人の小説家としての想像で埋めようと試みた作品」であると説明し、更には森鷗外の『歴史其儘と歴史離れ』におけるものいいを借りて、「『楼蘭』は〝歴史そのまま〟の作品であり、『敦煌』はある意味で〝歴史離れ〟の作品である。」と述べている。この井上の発言はまさに驚きという外はない。『敦煌』を「歴史離れ」とすることはひとまず認めるとしても、『楼蘭』を「歴史其儘」とするのは、「歴史其儘」というい方をいかに控えめに解釈したところでとうてい首肯され得るものではなかろう。

周知のように、『敦煌』は千仏洞から発見されたおびただしい経巻類がどうしてここに収められることになったのかというその成り行きを、超行徳その他の架空の人物を設定して描いた作品で、まさに「歴史のブランク」を「想像で埋めよう」とした作品であるというのは一応うなずける。それに対して『楼蘭』は、そのような架空の人物を設定することなく、ヘディンの『彷徨える湖』をもとにしてヘディンの謎解きにそって確かに歴史的事実、時間の枠組みにそって書かれているとはいえるわけだが、「史実を並べた書き方」とはどう考えてもいえないだろう。

もちろん、大岡も再論において、「『楼蘭』が歴史そのまゝだなんて、まつたくお笑い草だが、いわば「歴史的感覚」が欠けているから、「敦煌」が「歴史離れのした歴史小説」だなんて、ナンセンスが平気で言えるわけである。」と辛辣なことばをあびせている。更に、井上が森鷗外の言を借りて述べていたことを逆手にとって、「鷗外の文章は歴史を

離れようとしても離れられない苦衷に満ちていて、その後彼が史伝に深入りして行つたのも、周知の通りである。」と述べ、井上がそのような鷗外の「苦衷」を全く意に介していないことを暗に批判するのである。

大岡の指摘は基本的にはあやまりではない。しかし、鷗外を持ち出してのここでのものいいはどこか高飛車な姿勢を感じさせなくもない。『歴史其儘と歴史離れ』において鷗外は、「歴史を離れようとしても離れられない苦衷」を述べ、その後そのような「苦衷」から脱するためにいわゆる史伝へ進んでいったのだとする見方は、むろん大岡の独創ではなく、当時の一般的な通説である。そして井上とてもその通説を、まさしくその通説のいうレヴェルにおいて理解していなかったというわけではない。井上も次のように述べていた。「鷗外の「歴史そのまま」と「歴史離れ」の作用は、歴史小説を書いている作家の心の中にいつも交互に現れて来ることかと思う。」と。だから、大岡も井上も鷗外理解という点ではそれほどへだたっていたわけではない。大岡のものいいにどこか高飛車なところが感じられるのはおそらく、そのことを大岡自身わきまえていなかったからであろう。つまり、大岡も鷗外のいわゆる権威から完全に自由ではなかったといわざるを得ない。しかし、もちろんこのことは論争の大岡の発言において大きな問題とはなり得ないし、ましてや限界というべきものではない。そして、もし限界というべきものを指摘するとするならば、それは大岡の鷗外理解が井上とともに当時の通説を出ていなかった点にあったといわねばならない。しかし、それを限界とするのはやはり酷というべきかもしれない。当時の通説は現在も基本的にはなお通説であり続けているからである。管見によれば、鷗外に関する問題はそれほど簡単ではなく、通説は根本的に検討し直さなければならない。そのポイントのひとつは、鷗外のいう「歴史」とは何を指していったのかということであり、もうひとつはこれまでの歴史小説と史伝という区分ははたして有効かということ、以上二点であるが、これについては後に述べる。

さて、以上のことをおさえた上で先の大岡の再論に戻るならば、そこで述べられていた最も重要な指摘は次の点になる。『楼蘭』が「歴史其儘」であるというのを「まったくお笑草」と否定すると同時に、『敦煌』が「歴史離れ」であるということも「ナンセンス」と批判していることである。つまり、『敦煌』を「歴史離れ」であるとすることをも大岡が否定するのは、架空の人物を設定していわゆる歴史の秘密を解くといった作品などそもそも「歴史」から離れるか否かといった次元にはなく、それは「歴史」云々を問題にする以前のことだといいたかったのである。「歴史其儘」と「歴史離れ」を両極として、その間にいわば無数の歴史小説が存在する、どこをとっても歴史小説には変わりあるまいといった井上の発想からは、そもそも歴史小説の問題、歴史と文学といった問題など生まれるわけはないのだというのが大岡の根本的な問いであった。大岡は先の指摘にすぐ続けて、「歴史がジュースみたいに、量的に加減出来るものとして考えられているのは、異とするに足りる。」と述べている。いくら水で薄めてもジュースはジュースだといった発想では歴史小説の問題は解けないのだということである。このような揶揄的な比喩に、井上をすでにまともな論争相手としては見ることができないというあきらめに近い気持ちがうかがえる。「歴史小説は歴史から離れなくては書けない。しかし、逆説めいて恐縮だが、人は歴史に忠実であることによって、はじめて歴史から離れられるのである。」というのが、この問題についてのしめくくりのことばだが、むろんこれは逆説でもなく、「逆説めいて」もいない。

以上の点が、おそらく大岡昇平の発言における、そして同時にこの論争における最も重要な指摘であった。このように考えてみると、当然のことながらはじめの論で一定の評価を与えていた『楼蘭』や『洪水』といった作品を、大岡はいわゆる歴史小説とは見ていなかったことになる。『敦煌』はいうまでもない。確かに大岡はそれらの作品を歴史小説だとは一言もいっておらず、かなりことばを選びながら、『楼蘭』を「遺跡があるだけで歴史はなく、氏の空想は

つゝましやかに、しかし大変現実的に飛翔している。」といい、『洪水』の方は「ファンタスチックな自然との戦いの描写で、氏の空想は意外にレアリスチックである。」と述べていたのである。大岡の歴史小説に対する見方、歴史と文学に関する見方がここにもはっきりと表われている。そして、それは再論における鷗外に関する発言にも見てとることができる。

鷗外が「歴史其儘と歴史離れ」を書いたのは大正四年の「山椒大夫」についてであり、これは周知のように、伝説を小説にしたもので、鷗外はそれを歴史小説と呼ぼうとはしていない。

大岡はここで、『山椒大夫』を歴史小説でないといおうとしていることは明らかである。そう考えるのは、『楼蘭』や『洪水』を歴史小説ではないというのと同じ理由によるだろう。しかし、揚げ足とりのように聞こえるかもしれないが、『歴史其儘と歴史離れ』において鷗外は確かに『山椒大夫』を「歴史小説と呼ぼうとはしていない」が、歴史小説ではないということをいおうとしていたわけでもない。だから、大岡は『歴史其儘と歴史離れ』をやや過剰に意味づけて読んでしまっていたといえるのだが、しかし、大岡が鷗外の歴史小説、史伝に関する当時の通説を越え出る可能性があったとしたならば、その突破口はまさにそこにあったというべきであろう。すなわち、『山椒大夫』が歴史小説でないことを、他の鷗外の歴史小説や史伝の表現をそれぞれの依拠資料と比較しながら一度改めて分析し、それらと照らし合わせることによって明らかにすること。そして、鷗外自身そう考えていたとしたならば、それを他の鷗外の発言をも考えながらそれらと実際の作品の表現とを合わせ考えることによって明らかにすることである。だが、そ

の論証はおそらく失敗したであろう。ただ、新たな見方がもし生まれるとするならば、それはおそらくその過程において生まれたはずである。大岡が一度その失敗をしてみなかったこと、そのことがやがて一連の歴史小説論においてよりはっきりとした形で現われてくることになる。

第二章　一連の歴史小説論

歴史小説論執筆のモチーフ

『蒼き狼』批判にはじまった「常識的文学論」はその年いっぱい続くが、その翌々年一九六三年六月から大岡昇平は、『文学界』に「現代小説作法」という副題を付した連載を行なう。それは次の年の十一月まで断続的に十三回にわたったが、最後の六回を大岡は歴史小説を論じることに当てている。『蒼き狼』論争で問題にした歴史小説の問題を、ここで改めて考えてみようとしたものであることはいうまでもない。論争においてあれほど完膚なきまでに論破していた、少なくとも自身はそう思っていたであろう大岡が改めてそのようなことを行なおうとしたのは、むろんかつての考えの不十分さや行き届かなかった部分を反省したためでもあったろうが、このとき大岡にとってそれがとりわけ重要な問題として積極的に捉えはじめられていたからに外ならない。そこには、大岡個人のいわば内発的モチーフといったような何ものかもあったことであろう。ちょうど連載の期間中に大岡は『天誅組』（『産経新聞』、'63・11・18～'64・9・25）と、それと同じ題材を扱った二、三の単品を発表している。そのことに加え、たとえば後の『わが文学生活』

（中央公論社、'75・1）[6]における、「井上靖さんと論争を始めた時には準備していたんです。『天誅組』は四八年に保田与重郎が注した『南山踏雲録』を『作品』の編集者の八木岡英治から貰った時から、書くつもりだった。」「その前に戦争中の菊池寛の『天誅組罷り通る』を読んだ時から興味を持っていたんです。」という発言を合わせ考えれば、そこに大岡のいわば内的な歴史といったものを見ることもできるだろう。しかし、天誅組といういわゆる歴史に興味を持つことと、『天誅組』という歴史小説を書くことと、歴史小説一般を論じることは明らかに別のことであり、そこに何らかの内的関連をつけようとすれば、そこにはおそらく物語りをまぬかれることはできなかろう。つまり、天誅組に興味を持てば『天誅組』が書かれるわけでは決してなく、歴史小説『天誅組』を書くには歴史小説論が必要なわけでもまた決してないのである。

大岡昇平にとってそのとき、歴史小説について改めて論じなければならなかったのはおそらく、論争において提出した問題がその後ほとんど全く問題にされることがなかったためであろう。論争時のやや的はずれないくつかの論を除いてその後三年のあいだ、この論争をまともに取り上げ論じたものは皆無である。それだけではない。丹念に探してみるとわかるが、実は歴史小説あるいは歴史と文学に関する論自体は少なからず書かれているのだが、そこでもこの論争に触れることさえされていないのである。仮に、大岡が故意に無視されたと思ったとしても、それは一人よがりの思い込みではなかったというのが実情だったのである。

そしてもうひとつの理由は、過去の歴史小説論を調べていくうちに大岡は、ルカーチと岩上順一以来まとまった歴史小説論と呼べるものがないことに改めて気がついたためであろう。つまり、いまここで歴史小説の問題を史的かつ理論的に整理し論じることの、いわば客観的な意義を自覚したということである。ルカーチと岩上のは、ともに今日

でも決して無視できない重要な指摘を持つ論だが[7]、やはり時代的な制約あるいは偏向をまぬかれてはいなかったからである。

そして結果として、大岡の歴史小説論はその意義を達成し、かつ最もすぐれた水準を達成していたのである。とりわけその理論的あるいは本質的な発想の点において、そして日本の歴史小説の新たな捉え方という点においてである。『歴史小説の問題』の「あとがき」で大岡は、「勉強を兼ね、ノート代りに書いたエッセー」だといっているが、それをエッセーと呼ぶにはいささか高級であったという外はない。それはあるいは、まさしくエッセーとしかいいようのないそれまでの多くの論に対するイロニーを含ませたい方だったかもしれない。ただ、「勉強を兼ね、ノート代りに書いた」というのはおそらくそのとおりで、大岡の論は決して系統的にまとまったものではなく、くりかえしも多く微妙に主張がゆれているところもある。大岡自身そのことに気づいたのであろう。最終回の最後に十二項目にわたって自論のまとめを行なっている。それを見れば、大岡の考え方のおおよその発想とその基本的な枠組みを理解することができるが、しかしこのまとめ自体、実は決してうまいまとめ方にはなっていないのである。

大岡の論は、やや断片的になるがその重要な指摘を拾いながら見ていった方が簡便かつ要領よいまとめになろう。

史的・理論的考察

最初に注目したいのは、歴史小説について論じることがそもそも何故重要なのかといったいわば根本的な問題である。歴史小説を論じる際に一番問題化することはいうまでもなく、いわゆる事実(史実)の問題である。『蒼き狼』論争

ももちろんそうであり、その他の歴史小説をめぐる議論もそれが問題にならないことはない。その議論の中心になるのはこれまたいうまでもなく、歴史小説は事実(史実)をどの程度変えてもよいのかあるいは悪いのかということであった。しかし、そもそも何故事実(史実)といったことが問題化されるのかということは、実はまともに論じられることはなかったのである。それはある意味で当然のことであったともいえる。歴史小説は何らかの事実(史実)をもとにして書かれるからまさに歴史小説なのであって、歴史小説において何故事実(史実)が問題になるのかという問いは、一見トートロジカルな問いになるからである。しかし、それは歴史小説を論じることの意味につながる重要な問いになるはずである。

たまたまリアリズムの理想を見出したのが、十九世紀という、われわれに身近な世紀であるため、われわれは歴史小説において、史実が気になるというにすぎない。歴史も小説も、常に過去形で語られるという共通点を持っている。虚構の物語でありながら、作者の想像力の統制によってそれがほんとうにあった通りだ、と感じられる場合、小説的感銘が一層強くなる、という事情が生じる。

歴史と小説がもと同語であることは、よくいわれることである。歴史つまり厳密な事実と虚構が対立するものという意識が生れるのは、空談にだまされてはならない、という社会的必要からでなければならない。国家の起源について、或いは事件について、正しい報道が、政治的方針をきめるについて、必要と感じられる場合、歴史が作られる。(「歴史其儘と歴史離れ」[8])

前半は文学論的あるいは文学史的な面での、後半は功利的あるいは政治的な面での指摘といえようが、特に注目すべきなのは、歴史小説における事実(史実)の問題をリアリズムとの関連で捉えた前半であろう。大岡には、歴史小説がひとつのジャンルとして成立したのは十九世紀になってからであるという見方があり、それは何度もくりかえし述べられている。そのもともとの発想はルカーチによっているが、しかし社会主義リアリズムといういわば政治主義の文学理論から捉えていたルカーチに対して大岡は、バルザック、スタンダールからゾラ、フロベールへとつながる十九世紀フランスのリアリズムの、いわゆる手法の視点から捉えたのである。近代歴史小説の発生はまさにリアリズムの誕生と同時期であり、それは決して無関係ではなく、歴史小説において事実(史実)が問題になる理由もそこにあるという考えは極めて重要な指摘であった。しかしそれよりも重要なのは、単にそのことだけにとどまらず、引用の後半における指摘も合わせ述べていた点であり、そのようないわば二面性を持っていることの指摘になっていた点であろう。歴史小説を論じることの難かしさもまさしくこの二面性にあるからに外ならない。そして大岡の歴史小説論は、おおよそこの二つの面から発想されそれらを中心にして展開されているといってよい。

あらゆる文学的活動は人間の行為である以上、思想的動機と同時に、快感充足の原理に従う。苦心の制作とか、苦行僧のような節制といっても、そこに秘密の喜びがなければ、作家は創作という不自然な行為を続けられはしない。

従って歴史小説は特定な作者が、特定の歴史的題材に取りかかった主体的動機と、作品において実現された歴史の客観的成果の両面において観察されなければならない。(「現代史としての歴史小説」[9])

これはごく当り前の指摘で、ことさら取り上げるようなことではないようにみえる。しかし、それまでの歴史小説評価、そしてそれ以後現在に至るまでの歴史小説評価の多くが、作者の「主体的動機」か作品における「歴史の客観的成果」のいずれかに大きく傾いていたことを考えれば、大岡の指摘は今なお重要かつ有効な視点たり得ているといえる。たとえば、『蒼き狼』論争における井上靖は極端に前者に傾斜していたわけだが、この「主体的動機」の方に傾斜する傾向を持っていたのは、主としていわゆる大衆時代小説作家と国文学者であったといえる。それに対して後者、「歴史の客観的成果」の方に傾斜する傾向にあったのは、主としていわゆる民主主義文学系の作家批評家と歴史家の一部の人たちであった。歴史家の一部といったのは、ごく少数の人々を除いて一般に歴史家は歴史小説を論じることはしなかったからである。ただ一言いっておくならば、このようにどちらか一方に片寄らざるを得ない作品が現実に多かったという事情があるように思われる。

ところで、『蒼き狼』論争における大岡昇平はどうであったかといえば、それはやはり後者に傾いていたといわざるを得ない。ただ、大岡は典拠資料と作品を比較することで結果的に井上のいわば「主体的動機」にも触れ、しかもそれを大きな問題として取り上げていた。その意味で前者の方からも論じていたといえるのだが、しかし大岡は、それを否定的媒介としながら結局は「歴史の客観的成果」の点から『蒼き狼』を評価していたのである。そして少なくとも、井上や、大岡に批判された批判家をはじめとする少なくない人々は、大岡の論を極端に後者に傾いたものと捉えていたことはまちがいない。大岡もむろんそのことを感じていたはずである。大岡がここでそのような発言を行なっていたのは、そのような誤解、しかしある程度は正解であるという意味ではいわば過度のあるいは必要以上の誤解に対してそれを解こうとする意図、ないしは自己弁護の意味もあったにちがいない。そしてそれと同時に、自己のやや

後者に片寄ったあり方に対する反省もあったと考えられる。というのは、先の引用の前半を読めばわかるように、ここでは明らかに「主体的動機」の方を強調したい方になっていたからである。引用の前には、たとえばどんなに過去の再現という「学究的意図」で書かれた作品でも、ただそれだけで成立するものでは決してないと述べられている。つまり、「女王の衣裳や祭儀の細目に関する詳細な追求」も、「過去の事物に対するフェティシュな嗜好」なしには考えられないというのである。更に引用の後には、歴史小説についての批判が「歴史的記述のアナクロニズム」の指摘に集中していることを批判している。木下藤吉郎は矢矧の橋で蜂須賀小六に見出されたことになっているが、当時矢矧川には橋がなかったとか、『サランボー』にはカルタゴの水道を破壊する場面があるが、水道は後代の建造物であるとかいうのは、「重大な欠陥であるが、本質的な欠陥ではない」というのである。

『蒼き狼』論争における大岡昇平に、そのような視点がなかったわけでは決してない。述べたように、作者の「主体的動機」にも触れ、しかも作品における「歴史の客観的成果」の方も、いわゆる民主主義文学系の人々にありがちな、作品からまさにそれだけをイデオロジカルに切り取ったり切り捨てたりすることをせず、あくまでも表現としてのひとつの作品として分析していたのである。井上靖の『楼蘭』や『洪水』をまた別な視点から評価できたのもそのために外ならない。『蒼き狼』論争における大岡がこのときとちがっていた点があるとすれば、それは特定の対象を攻撃するための時評文、論争文としてそれがかかれていたことからくるちがいであろう。

さて、大岡の歴史小説論の中でおそらく最もよく引かれるのは、次の部分であろう。

歴史に死んだ子を惜しむ母親の歎きを見るのは正しく、司馬遷の歴史意識に、宮刑を受けた者の汚濁の意識を見

るのも、間違いではあるまい。しかしこれらの感情的理由から、歴史全体を律しようというのは、幾世紀にわたる修史家の地下作業、過去を詳細に知りたいという自然の要求を無視することになる。一民族が母親の感情だけで生きていたら、確実に亡びてしまうだろう。

こういう現代の歴史主義の偏在のために、歴史小説家や歴史劇の作家は、感情的理由によって読者の興味を繋ぐことができるのである。歴史変更の自由までも享受しているのである。それだけに歴史小説家の責任は本当は重いのである。（「現代史としての歴史小説」）

正確にいえば、よく引かれるのは前半であるが、それは小林秀雄の「歴史について」（『文芸』、'39・5）や「歴史と文学」（『改造』、'41・3、4）における発言を念頭に置いたものであったためであろう。[10] が、私が注目したいのは主として後半の指摘である。大岡昇平は、歴史主義というものが現代にいかに根強く存在しているかを指摘する。引用の少し前には、「歴史とは一般に論じられるように、国家の興亡や英雄の生涯に限られるものでもなければ、庶民の生活や経済の中にだけあるものではなく、現代人の認識のパターンをなしているといっても過言ではあるまい。」と述べている。そして、そもそも歴史小説が成り立ち得るのもこの歴史主義のおかげたというのである。

大岡の発想のひとつのヒントになっていたのは津田左右吉の「日本の文学史に於ける歴史文学」（『文学』、'51・10）であった。津田左右吉はそこで、いわゆる近代の歴史小説は次の二点のいずれかをその主とした動機として作られていると述べている。それは、「昔の或る人物とその事蹟との何の点かに、時代のちがひを超越した普遍な人生とその意味とを認めて、それを描かうとするのか」、あるいは「現代とは違った昔の時代の人心なり世相なりに興味をもって、

それを写さうとするのか」[11]である。そして津田は、どちらにしてもそれは結局、「人の生活なり世の姿なりに歴史的変化のあることを認めるところに根拠がある」と述べている。津田の指摘する二つの動機とは、つずめていえば過去と現在の共通点に注目するのか相異点に注目するのかということだが、そのいずれも実は歴史的変化ということを認める上に成り立っているというのである。後者の場合はいうまでもなく、前者の共通点に注目することも要するに変化を前提にしてはじめて可能なことだからである。変化のないいわば全く同じことにことさら共通点を見出そうとすることなどあり得まい。大岡のいう歴史主義とは、歴史には歴史的変化がある、要するに歴史は変化するというこの考え方のことである。しかし、これはごく当り前のこと、というよりは何かもとの木阿弥といった感を否めない。だがそう感じるのは、大岡がいうように、それほど現代のわれわれは歴史主義に浸りきっているからなのであろう。津田も先の指摘に続けて「昔はさういふことが明らかに考へられてゐなかった」と述べている。そのようなことが考えはじめられたのは明治以降のことであり、それはまさに近代の歴史小説のはじまりと符合するというのであった。

ただし、歴史主義というのは極めて広い意味を包括し得る、いってみればかなり曖昧な概念でもある。歴史は変化するという考えは、たとえば時は過ぎゆくあるいは昔は戻らないといった感慨とおそらくはひと続きであろう。先の引用において大岡が「感情的理由によって」という一句を付け加えていたのは、歴史主義のそのような側面を考えていたからであろう。というよりは、ここではむしろそのようなネガティブな面に焦点を合わせたい方だったのである。よく引かれる前半部分も、むろん同じ発想からのものいいであったことはいうまでもない。大岡は、歴史変更の自由を享受できるのもまた歴史主義のおかげに外ならないとも述べていた。単に「感情的」に歴史は変化するといった意識のもとでは、こまごまとした歴史の変更など問題になり得ないからである。大岡が歴史哲学をやはり否定的な

契機において取り上げていたのも同じ理由による。歴史が変化するなら当然、その変化の仕方に関し様々な立場からの様々な議論が起ってくるだろうからである。

政治的或いは思弁的理由により、自由と必然、合目的性と不条理、歴史に目標ありや終末ありや等への無限の「歴史哲学」の論議が生れるのである。（「現代史としての歴史小説」）

人類の世界史だけを対象とする限り、歴史哲学が混乱するのは当然で、政治的偏見と党派心によって、醜悪な空論を繰り返しているのである。（同）

大岡が、歴史小説を論じる上ではかなり便利なあることばを、おそらくは意識的に避けていたのもやはり同じ理由によるだろう。それは史観ということばであった。ただ、大岡はかつてそれを相手を攻撃するために肯定的な意味で使ったことがある。もちろん、『蒼き狼』論争の際である。二つの論のそれぞれに一度ずつ大岡はそのことばを用いていた。

井上氏は「蒼き狼」の安易な心理的理由づけと切り張り細工をやめねばならぬ。何よりもまず歴史を知らねばならぬ。史実を探るだけでなく、史観を持たねばならない。

小説家でなくても話のうまい人はいるし、よい歴史の本が物語のように、やさしく面白いのは、高柳光壽氏「山崎の戦」に例がある。やさしいのは使つている史料の調和が取れているからだし、面白いのは歴史に対する愛情があるからである。

これが史観というもので、むずかしいことを要求してるわけではない。

以後大岡は、史観ということばを、少なくとも肯定的な意味では全く使わなくなる。この一連の歴史小説論においてもただ一度だけ用いられているが、むろん否定的な意味においてであり、それは歴史哲学と並称されてでてくる。「歴史とは常に現在から見られた過去であるから、時代の変遷によって、絶えず書き替えられる。数多くの史観或いは歴史哲学が争うということになる」（「歴史其儘と歴史離れ」）と。

ところで、先に津田左右吉が歴史小説を作る主な動機として述べていた二つは、その作品を評価する際のいわば対立する二つの見方でもあった。すなわち、過去と現在の共通点を描いた作品か、相異点を描いた作品かである。そしてその場合、一般に後者の方が評価は高かった。過去、まさに現在とはちがうという意味での過去を描くのが、歴史小説の歴史小説たるゆえんであると考えられていたからである。そしてその評価は、おおむね過去そのままとか過去のありのままといったところへ向っていた。それに対して前者は、おおかた過去の背景だけを借りて結局は現代を描いているという評価の方向へ向っていったのである。これはある意味では仕方のないことだったともいえる。何故なら、それらの作品において過去と現在のあいだに見出そうとしていたいわゆる共通点はおおむね歴史学的な考察を経たものではなく、いわば恣意的なものだったからである。しかも、共通しない他の相異部分における記述もまたいい

かげんであったからである。だから、厳密にいえばこれは津田のいっていたような作品ではなく、実は先の二つの外に付髄的に述べていた、「古人の心事や行動に新解釈を施さうとする動機から出たもの」に近いだろう。しかし、先の基本的な二つの分類のいずれかといえばやはり前者の部類といえる。

何故このようなねじれないし偏向が起っていたのか、それはおそらく、津田のいうようないわゆる共通点を描いた作品がほとんどなかったためであろう。しかし、いわゆる過去と現在の相異点を描いた作品の方も、実はどれだけ歴史学的な手続きをとった上で書かれたものなのかははなはだ疑問な作品が少なくなかったのである。しかもなおたちが悪いことには、にもかかわらず当の作者自身、過去をありのままに描いているといったことを自負もし、しばしば広言もしていたことである。だから、いいかげんだったのは何も先のような作品の作者だけではなかったのである。そしてもっといいかげんだったのは、それらの作品を論じた批評家であったというべきだろう。歴史学的な考察はもちろんのこと、作品の典拠とした資料さえ読まずに、気楽に過去そのままとか過去のありのままといった評価を一方に与え、かたや一方を歴史小説にあらずと一蹴していたからである。『蒼き狼』論争における大岡の出発点となっていた発想もそのような在り方に対する批判に外ならない。

誤解のないようにいっておくが、私は歴史小説はすべからく歴史学的な手続きと考察によって評価すべきだといっているのでは決してない。ただ、津田左右吉のいうような過去と現在の共通点や相違点を描いているというような視点で作品を見ようとするならば、そして過去そのままとか過去のありのままといった評価を与えようとするならば、それが最低限の前提となるはずだということをいいたかっただけである。歴史小説の評価はそれのみではできないことはいうまでもない。そして他の様々な視点からも見るならば、いわゆる過去をありのままに描いていないから歴史

小説にあらずと一蹴するような評価も生まれてこないはずであろう。

『歴史其儘と歴史離れ』の解釈

大岡昇平の歴史小説論のすぐれた点は、その理論的あるいは本質的発想の点だけにあるのではない。その具体的な作品評価の点でも注目すべきことが少なくない。その中でも特筆すべきなのは、やはり江馬修『山の民』の評価であろう。しかしその前に、『蒼き狼』論争での発言との関連という意味で、まずは森鷗外に関する発言を見ておきたい。むろん、鷗外に言及されることが多く、しかもそれが大岡の論のひとつのポイントになっているからでもあることはいうまでもない。

『蒼き狼』論争で触れていたのは『歴史其儘と歴史離れ』であったが、それについて大岡は、「鷗外の権威と「歴史其儘と歴史離れ」という問題の設定の持つ奇妙な「現場性」によって、多くその後の日本の歴史小説家の活動を束縛した。或いは逆に「歴史離れ」の美名によって、恣意的な歴史製造の口実を与えた。」（「歴史其儘と歴史離れ」）と述べている。現在では、この発言は当時ほどの衝撃力はおそらく持たないだろう。「鷗外の権威」は相対的に低下し、また「奇妙な「現場性」」だけにしがみつくことの無邪気さも少しは理解されてきたといえる。しかし、基本的にはやはり同様な衝撃力を持っている。それくらいまでには「鷗外の権威」は今なお権威としての力を持っているし、また「奇妙な「現場性」」によりかかろうとすることは基本的に改められてはいないのである。そうでなければ、自作『山椒太夫』の解説、というよりはいわば製作苦労話しといってよい『歴史其儘と歴史離れ』を、ことあるごとに歴史小説論

の見本のごとく取り上げられることや、今なお大岡以前の歴史小説論議をくりかえしてやまないことを説明できないだろう。大岡の発言は、鷗外のものいいを都合のいいように解釈してきたことに対する強烈な批判だったのである。

では、鷗外のものいい自体に対しては大岡はどのように見ていたのだろうか。一言でいえば、それは鷗外の発言の曖昧な部分を十分に追求し明らかにすることをせず、いわば曖昧なままにほぼそれを鵜呑みにしていたという側面が強かったといわねばならない。つまり、鷗外の発言を十分に相対化する視点を持ち得ていなかったといわざるを得ないのである。

> わたくしは史料を調べて見て、其中に窺はれる「自然」を尊重する念を発した。そしてそれを猥に変更するのが厭になつた。これが一つである。わたくしは又現存の人が自家の生活をありの儘に書くのを見て、現在がありの儘に書いて好いなら、過去も書いて好い筈だと思つた。これが二つである。

これは、大岡もいうように「すでに多くの鷗外研究家によって使い古された」、『歴史其儘と歴史離れ』（『心の花』、'15・1）の一節だが、大岡も「念のために引用して」いたので、ここでも一応引いておいた。これについて大岡は、「鷗外が自然をかっこでくくっているのは、無論自然主義に対するあてこすりである。」「この宣言には「自然」を自然主義者から取返そうという意図が含まれていたろう。」（「歴史其儘と歴史離れ」）と述べている。そして更には、「ただ、この場合の「自然」にはフロベールの場合のように、対象をありのままに写すという技法的問題意識がなかった。」と述べている。鷗外が「自然」ということばをどのような意図で用いていたのか、またそこに欠けていた問題意識は何

であったのかという大岡の指摘はそのとおりであろう。しかし、では鷗外のいう「自然」とはいったいどういう意味なのか、そしてそれが歴史小説を論ずる上でどのような意義があるのかということについては述べられていない。にもかかわらず、大岡はそれを意味ありげにしかも自己の主張のポイントとなる重要な部分で用いていた。

創造と事実との関係、歴史の中の「自然」は、鷗外によって始めて意識された。彼の最初の歴史小説「興津弥五右衛門の遺書」が、乃木大将の殉死を動機に生じたかどうか、という問題と関係なく、鷗外の歴史小説は、歴史と事実の間の問題意識をめぐって展開された。(「日本の歴史小説」)

澀江抽斎から北条霞亭まで、ますます徹底的に対象と自我の縮小過程を辿り、遂には鷗外自身、または幕末の漢方医とその子孫の辿る運命に興味のない者には、読むに堪えない瑣細主義に陥る。

しかしここには明治的書生文学にはない豊かな社会的地平線の拡がりが生じた。歴史の「自然」についての最も意識的な作家が、その実行の結果において、最も広い社会的展望を開いた。

しかしその結果は、ここに鷗外の記述した人間の群像が、果してその事実そのままであるか、という歴史叙述自身の中にある、古い歴史と事実との矛盾が再び現われた。(同)

わかるように、「自然」は決して否定的な意味で用いられてはいない。大岡は、鷗外のいう「自然」の意味とそしてその意義を追求することなくいわば無批判的にそれを用いることによって、結局「自然」ということばに、ある深淵

な意味を仮構していたといわざるを得ないのである。しかし、『歴史其儘と歴史離れ』を読む限り、深淵といわずともある問題を含んだ何らかの意味をそこに見出すことはできないし、また歴史小説を論ずる上でも、それは何らかの新たな視点を与えてくれるような概念では決してない。その点については別の場所で論じたことがあるのでここではくりかえさない。[12]『歴史其儘と歴史離れ』において問題にすべきことがあるとするならば、それはむしろ「歴史」の方であろう。すなわち、鷗外のいう「歴史」とは何をさしていっていたのかということである。

先の引用部分で大岡は、「歴史の中の「自然」」、あるいは「歴史の「自然」」といういい方をしていたが、その前に大岡も引いていた鷗外のことばは、「史料」の中に「窺はれる「自然」」といういい方であった。つまり、「歴史」ではなく「史料」といっていたのである。むろん、鷗外は別に「歴史の「自然」」といういい方もしている。だからそのこと自体には何も問題はない。だが、では何故大岡はその発言の部分を引用しなかったのか、そして何故「歴史の（中の）「自然」」とだけいい、「史料の（中の）「自然」」といったいい方をしなかったのだろうか。更には、鷗外は何故「歴史の「自然」」といういい方の外に、「史料」の中に「窺はれる「自然」」といったいい方をしていたのだろうか。そのように考えるならば、やはりそこにひとつの問題がひそんでいるように思われる。このことについても先と同じところですでに論じたが、結論をいえば、『歴史其儘と歴史離れ』においては、いわゆる存在としての過去の事実（出来事）と書かれたものとしての資料（史料）とを明確に区別して論じられてはいなかったのである。したがって「歴史」と「史料」も特に区別して使われていたのではなかった。要するに、鷗外のいう「歴史」とはそのいずれとも取ることができるのである。誤解のないようにいっておくが、私は鷗外がその二つの区別を知らなかったといおうとしているのではない。この文章ではそれは区別して論じられてはいないということをいっているのである。ただ一度だけ明確に「史

料」と述べていたことが実はその混乱を示しているといえるだろう。

大岡昇平はおそらくその混乱に気がつかなかった。大岡は、鷗外がいっていたのはあくまでも史料ではなくいわゆる歴史の方だと考えていたのであろう。ただ一度だけだが「史料」ということばが使われていたことを大岡は見落していたといわざるを得ない。自身で引用していたにもかかわらずである。いわばそれほどに、鷗外は歴史のことをいっていると思い込んでいたのであろう。ただ少々気になるのは、先に引用したところで大岡は次のようないい方もしていたことである。「鷗外の歴史小説は、歴史と事実の間の問題意識をめぐって展開された。」と。更には鷗外のいわゆる史伝について、そこには「歴史叙述自身の中にある、古い歴史と事実との矛盾が再び現われた。」と。これらは、大岡の論全体の中でもいま一つ腑に落ちない部分なのである。つまり、大岡はここで何故想像(創造)と事実、あるいは虚構(フィクション)と事実といわずに「歴史と事実」といっていたのだろうかということである。大岡は他のところでは多くそのようないい方をしているし、先の引用の冒頭には「創造と事実との関係」は「鷗外によって始めて意識された」といっていたのである。もっとも、「歴史と事実」という問題設定自体は決しておかしなことではなく、むしろ極めて重要なことであろう。すなわち、書かれたものとしての歴史と存在としての過去の事実、もう少し簡単にいえば要するに歴史記述と歴史である。しかし、大岡の論は全体としてそのような問題設定で論じられていたのでは決してなかった。そしてこの部分もそのような意味でいっているようには読めないのである。鷗外の歴史小説が、歴史記述と歴史「の間の問題意識をめぐって展開された」とはどうしても考えられないからであり、またそれは「創造と事実との関係」というすぐ前のことばと矛盾するからである。また、鷗外のいわゆる史伝に「歴史叙述自身の中にある、古い」歴史記述と歴史「の矛盾が再び現われた」とは、ほとんど何をいっているのか意味不明になってしまうか

らである。

ただ、「歴史と事実」を強いて解釈しようとすれば、もうひとつ次のようないいかえも可能であろう。すなわち、先ほどの史料と事実である。しかし、大岡は史料と事実をかなりはっきりと区別し、たとえば史料については次のように述べていた。

> 史料というものは、或る行為がわれわれの目前で行なわれる、あるいはわれわれ自身が行為者である場合ほど、たしかなものではない。それは主に文書の形で残され、文書作成者の主観によって彩られ、事実の変更が加えられるからである。（「歴史其儘と歴史離れ」）

鷗外がいっていたのはもっぱら歴史の方だと考えていたのも、おそらく史料に対してこのような見方をしていたためであろう。

江馬修『山の民』の評価

江馬修の『山の民』は大岡以前にはほとんどかえりみられることのなかった、いわば埋れた作品であった。大岡によってまさに日の目を見ることになったのである。この作品がいわゆる文壇でほとんど無視されてきたのは主として政治的な理由によると大岡は述べている。江馬修は戦前プロレタリア作家同盟に加入し、戦後共産党に入党、一九五

〇年新日本文学会分裂の際には『人民文学』の幹部となるという経歴を経た人物だったからである。もちろん、それは大岡のいうとおりであろう。ただ、それだけの理由なら、たとえばナップの初代委員長であり、戦後やはり共産党に入り、後江馬と同じく『人民文学』の幹部になった藤森成吉の『渡辺崋山』（『改造』、'35・7～10）が、少なくとも『山の民』に比べれば多く読まれてきたことを説明できないだろう。『山の民』が読まれなかったもうひとつの理由はおそらく、それが歴史上のいわば有名な人物を描いた作品でなかったからであろう。この作品は飛騨高山に起った、いわゆる青山騒動と梅村騒動と呼ばれる二つの百姓一揆を描いた作品であった。更には、この作品がはじめ自費出版で出たためといったこともあったであろう。おそらくそのためであろう、岩上順一『歴史文学論』巻末の「歴史文学年表」にも載っていない。そしてそのこともあるいはこの作品が長くかえりみられなかった原因だったといえるかもしれない。一九七六年、尾崎秀樹『歴史文学論――変革期の視座――』（勁草書房、'76・8）における詳細な年表が出るまで、岩上のが唯一の歴史文学年表だったからである。

大岡昇平はこの作品に、「恐らくこれまでにわが国で書かれた最もすぐれた歴史小説ではないかと思われ」（「江馬修「山の民」」[13]）る、と最高級の評価を与えている。そう評価するひとつの理由として大岡は、「高山盆地の農民と、本郷、白川など山中の農民との相違が、描き分けられている。また新しい政府の地役人、郡中会所、町年寄、庄屋など、各階層の関係が、鮮明に描かれている。」と述べている。そして、その点については『夜明け前』を引きあいに出し、この作品では小作人については何ら記されず、また本陣庄屋、問屋という身分あるいは国学についての知識が恐ろしくない点を指摘し、『山の民』はそれとは「比較にならない知識と探求によって裏打ちされている」というのである。これは、歴史小説評価の際に行なうべき両側面として先にあげられていた、「作品において実現された歴史の客観的成果」

の方といえようが、大岡が述べるもうひとつの理由は、もう一方の「特定の歴史的題材に取りかかった」作者の「主体的動機」といえよう。それは、一言でいえば度重なる改作過程におけるその慎重さと執念である。『山の民』は、大岡も述べているように二度大幅な改作が行なわれているが、細かなそれを含めると更に数度に及んでいる。はじめに自家版三部作として出たのは大戦前の一九三八年から四〇年にかけてである。最初の大幅な改作は戦後の一九四九年から五〇年にかけて出版された冬芽書房版三部作においてである。自家版約千枚に五百枚を加え千五百枚に改作されたという。二度目は一九五八年に出版された理論社版四部作においてであり、このとき更に千枚を加え、合わせて二千五百枚に改作されたのである。この異常ともいえる書きかえを大岡は、戦後の維新史研究の進歩や、たとえば五八年の改作は「内容を読み易くし、形象化するという中国風の「大衆路線」」の影響にもみているが、しかしそれは「大正的ヒューマニスト的精進の結果」でもあり、その「作者の努力に敬礼せずにはいられない。」と述べている。そして大岡は、いくつかの改作の例をあげた後、全てにわたる本文と異同を検討するならば、「一人の作家における思想と技巧の成長について、教訓的な結果が得られるに違いない。」と結んでいる。

しかし大岡は、もちろんその欠点をも指摘する。これも先と同じ両側面からの指摘になっている。先に大岡は、農民が地域的によく描き分けられていると述べていたが、しかし「水呑百姓以下になると、その垂直の階層は十分に書かれているとはいえない」というのが、そのひとつである。つまり、「小前百姓はすべて、善意に充ちた被虐者としてしか描かれ」ず、「愛嬌のある保守性とか、悪がしこさぐらいまでは書かれるが、それらは結局善良に転ずる。」というのである。「この小説がそのすぐれた主体性に拘らず、底辺において、単調なのは、このためである。」と大岡は述べている。もうひとつは、この作品が作者自身の父親について書かれたものでもあったことだという。江馬修の父親

はいわゆる梅村騒動において圧制者の側に立った人物で、作品においても江馬弥平という実名で登場している。しかし、これは先に大岡が評価していた度重なる改作過程における慎重さと執念の拠るところでもあり、一概に欠点になるとはいえないはずである。大岡も、「人間の一番詳しいのが、自分の家のことであるのは当然で」あり、それは「大抵よい作品になる」と述べていた。しかし、「同時に、家門の見栄と誇りから、偽りの入り込むすきが生じるのも避けられない。」圧制者梅村速水の描き方について大岡は、「細部について幾分作者は強弁に陥り、梅村の性格が分裂しているように見える。」と述べている。

以上、大岡の『山の民』評価の論点を見てきたわけだが、このように見てみると、どちらかといえばその欠点の方が目立つのではないかという気がしないでもない。少なくとも「わが国で書かれた最もすぐれた歴史小説」というわりには、その評価点が論じ足りないという感を否めないのである。印象風にいえば要するに迫力がないのである。ただ、今見てきた大岡のものいいを少し子細に検討するならば、そしてやや好意的に解釈するならば、たとえば水呑百姓以下の人々が「十分に書かれているとはいえない」というのは、いわば「十分」ではないがそのような最下層の人々も描かれているという評価になっているといえる。あるいは、百姓は「すべて、善意に充ちた被虐者としてしか描かれない」といっているが、そのすぐ後には「愛嬌のある保守性や悪がしこさぐらいまでは書かれ」ているといっていたわけで、百姓はいわば善意のかたまりとして描かれているというわけではないという評価になっているともいえるのである。

『山の民』では農民は確かに善意のかたまりとしては描かれてはいない。いや、この作品を読んで感じるのは、むしろ農民の無知と自分たちだけのことしか考えない狡猾さではないだろうか。仮に「善意に充ちた被虐者としてしか描

かれ」ず、全ては「結局善意に転」じてしまうような描かれ方がされているとしても、少なくともわれわれはそのような農民にいわば全的に同情を寄せ共感を持って読むことはしないだろう。農民がかわいそうでないからではない。そのような農民にリアリティーがないからである。この作品で描かれているのは、善意に満ちながらもしかしまたそれゆえに無知で狡猾でもある農民だといってよい。この作品にリアリティーがあるとすれば、まさにそのようでしかあり得なかった農民のありようにあったというべきであろう。そして、その意味においてのみ農民はいわばよく描かれていたといえるのである。しかし、リアリティーという点でいえば、この作品において最もリアリティーのある人物は圧制者の方の梅村速水ではなかったか。

梅村はいわゆる急進的改革派の人物で、塩や味噌その他の物資を専売制にしたり、頻繁に起こる洪水対策として大規模な堤防工事を行なったり、あるいは農地の拡大政策を立てたりしている。現在から見ればいずれも長期的展望に立った重要な改革を行なっているわけだが、むろん農民にとっては負担以外のものとしては受け入れられず、しだいに不満がつのってくる。しかも、前任の鎮撫使竹沢寛三郎は無責任に年貢半減、諸運上金の軽減を約束していた。むろんそのようなことは実現すべくもなく、また新政府の方針でもなかった。約束は当然のことながら反故の形となり、したがって農民たちにとっては、梅村に変ってからろくなことはないということになっていくわけである。このような過程が、作品では主として農民の側の視点から描かれているが、もちろん梅村の視点で描かれる部分も少なくなく、その描写はむろん梅村の内面にも及ぶ。そこでは、大岡のいうように「細部について幾分」「強弁に陥」っているところもあり、また「梅村の性格が分裂しているように見える」ところも確かにある。しかし、いわゆる圧制者にはまた圧制者の論理があり、ここで梅村は決して悪代官的な悪玉として描かれているわけではない。いや、むしろ一個の人

間の内的論理としては十分なリアリティーを持っているのである。いわゆる「善意に充ちた」農民を相対化してくれる視点をそれは確かに持っているといえる。そうであり得たのは、むろん梅村という一人の人物の内面に記述が及んでいたためであろう。それに対して農民の方は、当然個々の内面を描き得ず、おおよそ集団的な描かれ方がされていたからである。そしてもうひとつの理由は、やはり作者江馬修の父親弥平が梅村の側近であったためであろう。この作品には、梅村並びに父親弥平のいわば冤を雪ごうとするモチーフがあったのである。[14] むろん、大岡のいうように「家門の見栄と誇りから、偽りの入り込」んでいた部分はあったにちがいない。しかし、この作品では決して梅村や弥平の弁護に終始していたわけではないことはいうまでもない。述べたような記述方法に加えて、「人間の一番詳しい」「自分の家のこと」と、『夜明け前』には比較にならない「幕末維新の地方生活について」の、「知識と探求」による「裏打ち」にもよって、よくリアリティーを保ち得た描かれ方がされていたのである。

それにしても、あれほどの賛辞を呈していた『山の民』を、大岡は何故十分に論じきることができなかったのだろうか。この作品に費やした紙数は最も多く、連載のほぼ一回分を使うというやや度を越した力の入れようであったにもかかわらずである。それは、述べたようにこの作品が、農民をいわゆる大衆として十分リアリスティックに描き得ていなかったからであり、また大岡自身そのような大衆をまさに大衆として描く自前の方法論をおそらくは持っていなかったからであろう。この作品を評価する際に、大岡が岩上順一と服部之總の『夜明け前』論に多く拠らざるを得なかったのもそのためであろう。『山の民』に次いで多く論じられていたのは『夜明け前』だが、それが主に論じられていたのはこの『山の民』論においてであった。つまり、この作品は主として『山の民』との比較上、しかもその否定的な契機として持ち出されていたといってよい。大岡の『山の民』評価は、岩上と服部の『夜明け前』論の視点を

媒介としながら、おおよそ『夜明け前』の否定面の克服という方向で行なわれていたのである。岩上のは、ほぼ同時代の作品である『夜明け前』を、それまでの歴史小説との関わりから論じたおそらくはじめての本格的な『夜明け前』論であり、服部のは戦後の維新史研究をふまえた歴史学者による画期的な論であったが、やはり大衆をまさに大衆として描く方法といったことに関する言及はなかったのである。

しかし、このことで大岡を責めるのはおそらく酷であろう。というよりは、もともと無理な注文をしているのかもしれないのである。何故なら、大岡も別のところでいっているように、「小説が個人的文学形式であるとすれば、大衆の心理を書き表わす手段は、元来ないのではないか、と疑わせる」（「日本の歴史小説」）からである。事実、大衆は「せいぜい理想的指導者の意識を通じて、典型的瞬間に典型的な動きをする力としてしか描かれ」ず、あるいは「潮」「浪」など比喩によって、絵画的に語られるだけ」ではなかったか。大岡のいうように、それは小説という形式がおのずから持つ制限なのかもしれないのである。大岡はそれを「個人的文学形式」といっているが、それは要するに事件や人物が「人間化」されるということに外ならない。歴史小説も、歴史に対する興味と同時に「人間」に対する興味」から生まれたものであり、それは結局「人間」の立場からの歴史の書き替えであった。」と大岡は述べている。大衆は個々の「人間」の集合であるにはちがいないが「人間」ではなく、それを「人間化」しようとすればもはや大衆ではなくなるであろう。小説にとって大衆とはいわば矛盾概念なのではないか、というのが大岡の疑問であった。ある意味でこれは恐ろしくペシミスティックな考え方ともいえるが、しかしこのような厳格かつ禁欲的な考え方があってはじめて根本的な歴史小説への問いが生まれてきたといえるし、また『山の民』に注目することもできたといえるであろう。そして、「個人的文学形式」の小説でだめならば、そのような小説の概念を大幅に変えた新しい小説の形式か、

あるいは全く異なる形式において、大衆を表現する方法を考えるしかないであろう。このとき、大岡がそのような何らかの方法を思い描いていたかどうか、大岡の論を読む限り少なくともその具体的方法を感得することはできない。むしろ、ペシミスティックな見方がやや加速されるような形で大岡の論は終わっている。最後に十二項目にわたって行なわれた自論のまとめの最後で、大岡は次のように述べていた。

人間は歴史に関与する時、大抵は欺かれる。史料に欺かれるだけではなく、その関与の仕方においても欺かれる。人間は自分がどういう風に、歴史と交渉しているか、自ら意識することが出来ないのではないか、と疑う時がある。（「現代史としての歴史小説」）

ただ、ようく考えればこれも大岡のいうとおりにちがいない。亀井秀雄がいうように、「もともと人間は歴史に関与などしない。ただかれが巻き込まれた具体的な事件に関与するだけ」（『個我の集合性――大岡昇平論』）だからである。だから、これも大岡の根本的かつ厳密な思考力を示すものに外ならないのだが、ただこう述べた後、本庄陸男の『石狩川』に触れて終わるそこでのものいいを見るに、そこにはやはり新しい方法論を未だ見極めていないことに対する文字どおりのペシミスティックな大岡のいらだちと苦渋を見ざるを得ないのである。『石狩川』は『山の民』、『夜明け前』に次いで多く言及されている作品のひとつだが、やや具体的に触れられているのはこの最後においてである。しかし、そこでは今までの分析的な論のはこびとはうって変わり、「歴史小説家は、歴史の重さとか、弁証法的発展とか口走っている時は愚劣だが、自ら意識しないその姿勢が作品に出ている時がある。それは特に文体に現われる。」と述

べ、ただ作品の冒頭を長々と引用してくるだけなのである。そして、最後に次のように述べられる。これは一連の歴史小説論の最後のことばでもある。

ここには英雄がいる。「山の民」「秩父困民党」などが、歴史的真実の把握においてすぐれた成果をあげながら、なんとなく魅力がないのと対照的である。「石狩川」は未完であったために、即発的な魅力を保持している珍らしい例といえる。

大岡昇平は、その後もいくつか歴史小説に関する発言を行なっているが[15]、それらはほぼ以前の発言のくりかえしにすぎない。新たな展開を見せるのはそれからちょうど十年、「歴史小説の問題」（『文学界』、'74・6）においてである。

注

（1）山本健吉・三浦朱門・村松剛「座談会・現代的英雄叙事詩――「蒼き狼」論」（『サンデー毎日』、'60・11・6）。手塚富雄「井上文学の新しい形式への試み」（『週刊読書人』、'60・11・14）。中村光夫「歴史小説」に新生面　井上靖氏の『蒼き狼』（文芸時評）」（『朝日新聞』、'60・6・20）。

（2）以下、『蒼き狼』論争における大岡、井上の発言はいずれも初出本文による。特に大岡の場合、後に単行本『常識的文学論』（講談社、'61・2）及び『大岡昇平集14』（岩波書店、'82・9）に収める際の二度にわたって、かなりの加筆訂正を行なっているので、論争のテキストとしてはそれらは不適切であろう。なお、言及部分においてそれが問題になる場合はその都度触れる。ただし旧字は新字に改めた。

（3）山本健吉「歴史と小説」（『読売新聞』、'61・1・18）。

同「再び歴史と小説について――大岡昇平氏に答える――」（『読売新聞』、'61・1・31）。
福田宏年「歴史小説の〝真実性〟とは？――『蒼き狼』論争への私見――」（『図書新聞』、'61・2・25）。

（4）この書は、明治四十年一月（大岡の再論では明治四十一年となっているがあやまり）大日本図書から、那珂通世訳注で『成吉思汗実録』という書名で上梓されている。が、大岡も井上も『元朝秘史』の名で呼んでいるので本論においてもそれにしたがう。また、大岡、井上が見ていたものはともに昭和十八年九月、筑摩書房から出された再版本で、したがって本論においてもそれを用いる。ただし旧字は新字に改めた。

（5）以下、大岡の『元朝秘史』からの引用は全て大岡による表記にしたがう。また『蒼き狼』からの引用も同様である。というのは、大岡の引用は全般的にかなり不正確で、そのあやまりはやはり指摘しておくべきであると考えるからである。あやまりの部分には傍点を付し、（　）で正す。また補足部分は〔　〕で記す。

（6）初出は『潮』12月号（'74・12）。

（7）その点については、拙稿「二つの歴史小説論の意味――ルカーチと岩上順一――」（『異徒』第9号、'91・10）。

（8）初出の標題は「政治と歴史小説」。以下、一連の大岡の発言は『歴史小説の問題』（文芸春秋、'74・8）所載本文による。ここでも大岡は、初出にかなりの加筆訂正を行なっているが、ここでは主としてその理論的達成を問題にしたいのでそれを用いる。なお、先と同様言及部分においてそれが問題になる場合はその都度触れる。

（9）初出の標題は「歴史小説と批評」。

（10）この前半部分は初出とかなりの異同があり、初出では小林秀雄に対する批判的口調がやや弱いといえる。
なお、この部分については、亀井秀雄『個我の集合性――大岡昇平論』（講談社、'77・5。初出は『群像』、'76・7～'77・2）に最も本質的な分析がある。

（11）津田の論の引用についても不正確な部分があるが、これは正してある。ただし旧字は新字に改めた。

（12）拙稿「〈歴史其儘〉と〈歴史離れ〉、または「歴史小説」と「史伝」」（『異徒』第8号、'88・4）。

（13）初出の標題は「歴史小説に現われた農民」。

（14）一九八五年十一月、春秋社より刊行された『山の民』の「後記」で天児直美は次のように述べている。「弥平は梅村の身近にいて、その人となりをつぶさに見てきた人であり、梅村知事のやろうとしていたことは早すぎただけで、本当は正しかったとして、梅村の死後その冤罪を晴らすために奔走している。修はこの父の遺言を果たすような気持ちで書いたと話していた。」

(15) 大岡昇平「歴史小説の現代的意味（上）　個人的真実を伝える新鮮さ」（『朝日新聞』、'65・3・8）。
同「歴史小説の現代的意味（下）　教科書的歴史への反抗修正」（『朝日新聞』、'65・3・9）。
同「歴史小説とはなにか」（『産経新聞』、'63・11・4）。
同「歴史小説論」（『全集・現代文学の発見第十二巻　歴史小説への視点』（学芸書林、'68・8）所収）。